

あとがき

平成三十年(二〇一八)十二月二日(日)に早稲田大学小野記念講堂において、第六回高麗郡建郡シンポジウム「古代百済郡の成立と高麗郡く建郡の実態をめぐって」が開催された。その講演者と演題は、田中史生氏(早稲田大学文学部教授)「百済王氏と百済郡、高麗王氏と高麗郡」、網伸也氏(近畿大学文学部教授)「難波百済寺の造営と百済王氏」、上原真人氏(京都大学名誉教授)「百済王の転抛と河内百済寺」であった。

田中講演は、文献史学の立場から、百済郡の建郡時期を天智三年(六六四)の百済王族善光らの難波配置、あるいはそれ以前に求める従来説に対して、天智九年(六七〇)の庚午年籍作成にその契機を求め、あわせて「百済王」姓の成立を取り上げた。また、考古学の立場から、網講演は難波百済寺の造営を善光の難波移住以前に求めてそれを百済郡建郡の前提とし、同じく上原講演は河内百済寺の造営開始を奈良時代後半に下げる近時の見解に対して、天平勝宝期(七五〇年代前半)とする従来説を再確認し、そこに百済王氏の河内への本拠地移遷の時期を求めた。

講演後には川尻秋生氏(早稲田大学文学部教授)と私(荒井)を司会とし、ディスカッションを行った。百済王氏の摂津国百済郡から河内国交野郡への移遷の背景に、従来から指摘されている百済郡が狭小であることとは別に、淀川水系の消長という視点がクローズアップされた。

本書は右のシンポジウムを受けて刊行される、高志書院の「古代渡来文化研究」シリーズの第二巻である。摂津国百済郡や摂津・河内二国の二つの百済寺に関わる第一部と、武蔵国高麗郡に関わる第二部で構成されている。

第一部は、講演者である田中・網・上原三氏に新たに論考を戴いた。さらに百済郡に関する専論がある文献史学の古市晃氏、また百済郡・百済王氏を考古学から考察する際に検討の中心となる難波百済寺(大阪市堂ヶ芝廃寺)と河内百済寺(大阪府枚方市百済寺跡)、その二寺と同範瓦を持ち同じく百済王氏との関係が想定される四天王寺や河内百済寺の北に隣接する官衙遺跡の禁野本町遺跡など、関連遺跡の発掘調査、報告書刊行に関わったことがある谷崎仁美・松野元宏・西田敏秀・竹原伸仁各氏にも論考を戴くことができた。

百済郡をめぐる大きな論点は、百済郡の成立時期、二つの百済寺の創建と百済王氏の動向であるが、各氏の論に相違がある。

百済郡の成立については、天智天皇三年(六六四)に百済王氏を摂津難波に配したことを端緒とするのか、あるいは古市氏が説くようにそれ以前の大化期にまで遡るのか。それと関連して難波百済寺及び百済尼寺の建立主体を百済王氏とするか、あるいは以前より百済郡の地に居住していた百済系集団とするか。さらには田中氏が年代を下げて庚午年籍作成との関係を指摘するように、論者々々意見が分かれる。

また、百済王氏がその本拠を摂津国百済郡から河内国交野郡に移遷させた時期と河内百済寺創建については、上原氏が堅持する天平勝宝期に百済王敬福が河内国守となったことをその契機とするのが従来説であるが、これに対して近年の河内百済寺の再調査によって検出された伽藍地外の付属施設の年代観である奈良時代後期を採用する説の可否、新説を採用した場合にその移遷・造寺の契機を長岡京遷都に求めるか否か、さらにはそれが交野である背景として、たび重なる桓武天皇の交野行幸以前の宝亀期の光仁天皇の行幸をどう評価するのかなどが複合的に絡み合っており、各氏の見解が分かれる。ぜひ、各論を比較、検討していただきたい。

なお、本シンポジウムに先だつ平成三十年(二〇一八)三月に、枚方市が「百済王氏とその時代」と題するシンポジウムを行い、プログラム冊子が刊行されている。また、四天王寺宝物館企画展図録『地より湧出した難波の大伽藍』も同月に刊行された。ともに本書の執筆者が関与したもので、写真やカラー図版も多い。あわせ参照されると本書の各論もより鮮明なものとなろう。

続けて第二部は、武蔵国高麗郡に関して、その建郡事情、高麗・入間郡域の生産遺跡、官衙・寺院跡のほか、建郡に関わる氏族・人物として肖奈氏(高麗氏・高倉氏)、高麗(肖奈)福信、大神狛麻呂を取り上げた本会(日本高麗浪漫学会)会員を主とする論考とコラムが並ぶ。

考古学からの考察を主とする須田勉・加藤恭朗・富元久美子・平野寛之・坂野千登勢各氏の論考は、視点・論点が相互に重なる部分が多い。若葉台遺跡群(埼玉県鶴ヶ島市(坂戸市)から出土した墨書土器銘の「時山」・「高山」を、『続日本紀』に肖奈氏として福信ともども載る大山・広山と「山」の字が共通することから肖奈氏の人と推定し、同遺跡群を高麗建郡に関与した高句麗系渡来人に関わるものとする。霞ヶ関遺跡群(同川越市)を高麗郡の母体である入間郡の郡家推定地とすること、さらには高麗郡の郡家周辺寺院としての女影庵寺(同日高市)など、高麗郡をめぐる考古学的共通見解ができてつつあるが、文献史学の宮瀧交二論考及び第一部の田中論考との比較検討が課題となる。

「帰化人」の東国移配や武蔵国の高麗郡・新羅郡建郡の目的と結果について、考古学では、遺跡・遺物をもとに地域開発や殖産興業があげられる。その一方、文献史学では、律令国家の施策としての考察がなされている。本書でも、宮瀧論考は、高麗・新羅建郡の背景として、百済建郡ともども東アジア世界における国際情勢の中での日本型中華思想の対外的アピールを指摘し、かつ養老公式令論奏式条の配置国郡規定との関係を説く。また、田中論考は、養老雜令蕃使往還条に基づき外国人使節が往来する西国から「帰化人」を東国に遠ざけたものであることを指摘する。私も同じく文献史学からの立場から、両氏同様に考えている。

高麗郡をめぐる考古学と文献史学の二つのアプローチが、両立するのか、あるいは乖離するのか。この点は、本シリーズ第一巻『古代高麗郡の建郡と東アジア』（二〇一八）でも扱われてはいるが、今後も総合的、学際的な研究が必要である。また、コラムでは、高麗の名を持つ織物（高麗錦）、高麗郡家関連遺跡（埼玉県日高市拾石遺跡）出土の国字「辻」の墨書土器、高麗郡に三つある古代寺院のうちのひとつ大寺廃寺（同市）の瓦を取り上げた。それぞれ高麗郡研究の重要なファクターである。

本書が取り上げた百済王氏と百済郡、高麗王氏・肖奈王氏と高麗郡、さらに対応する氏族がない新羅郡、この古代朝鮮三国の国名を冠した三郡―くわえて甲斐国の巨麻郡―の異同は比較検討が肝要である。その新羅郡に関しては、第七回高麗郡建郡シンポジウム「古代武蔵国の新羅郡と高麗郡の成立の背景を探る！」がすでに令和元年（二〇一九）十二月に開催された。その記録集をシリーズ第三巻として刊行することを期して、了としたい。

令和三年（二〇二二）一月十七日

日本高麗浪漫学会副会長

荒井秀規